

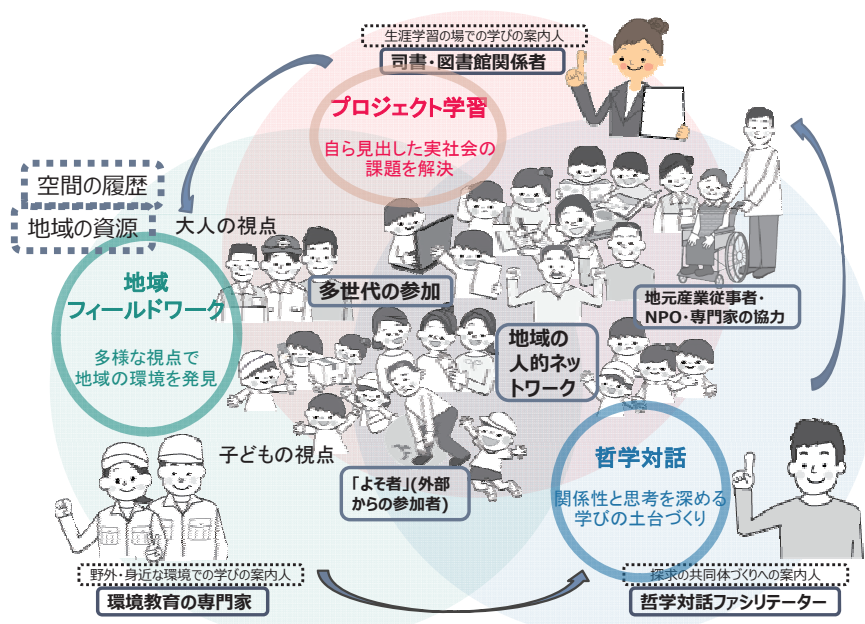
# 環境教育・地域づくりと連携した新しい図書館を目指して 気仙沼における活動事例①

福井 夏海（異文化コミュニケーション研究科修士生）

## 1. プロジェクトの概要

2016年10月30日（日）、「第1回気仙沼てつがく探検隊」が実施された。

このプログラムは、河野哲也教授（立教大学文学部）が社会技術開発センター（Ristex）の助成金を得て進めている「多世代哲学対話とプロジェクト学習による地方創生教育」のプレ事業として行われた。下図に示されるように、①地域の自然や文化、歴史をフィールドワークで体験、②フィールドワークで体験したことを哲学カフェの手法で話し合い、③深めた考えや課題について図書館で探究、という三つの軸からできている。プログラムを通して、様々な年齢の子どもたちが自分たちの住む場所の価値や課題を発見し、それを言葉にして話し合えるようになっていくことを目指している。またそのことによって、子どもたちや若い世代が地域をつくっていく原動力となっていくことを長期的には構想している。



プロジェクト概念図

([https://ristex.jst.go.jp/i-gene/projects/h28/project\\_h28\\_7.html](https://ristex.jst.go.jp/i-gene/projects/h28/project_h28_7.html) より抜粋)

### 1.1 図書館の位置づけ

本プロジェクトは、人々が地元の文化・環境を学びながら自分たちの言葉で語りあうことを目指しており、広い意味での“学びの場”をつくる試みと言える。そのような取り組みにおいて、公共図書館は重要な役割を果たすことができる、との考えが基本となっている。

宮城県の北端に位置する気仙沼市は、2011年の3月の東日本大震災によって大きな被害を受けた地域である。気仙沼市の中央図書館である気仙沼図書館は、高台にあったため津波の被害こそなかったものの構造的に危険な状態になり、同じ場所に建て替えられることになった。同時に、別の場所にあった児童館を併設した複合施設になることが決まり、新たな

生涯学習の拠点として2017年度末頃を目途に開館する予定である。この新しい施設がつけられることを契機に、図書館、環境教育、哲学対話という一見バラバラの分野で活動している人々が、共同で新しい学びのスタイルをつくっていけないものだろうかという思いからこのプロジェクトはうまれた。それが上記で概説した三つの軸となっている。

公共施設として設置基準が公的に決められている図書館および図書館複合施設は、日本各地で毎年、新たにつくられたり改修されたりしている。近年は建物としての機能性や利用者の居心地のよさ、地域の独自性などを重視されたユニークなものが様々につくられ各地で話題を呼んでおり、図書館はただ本を読むだけではない場所として一般の人びとにも認識され始めている。もちろん気仙沼の図書館もその流れの延長線上にあり、従来の「まちの図書館」という役目だけではなく、子どもから大人まで人々が集い、学び、楽しんで活動ができる場、生涯学習の場として生まれ変わることが期待されている。しかしそのイメージを市井の人びとが実感のもてる言葉にし、ハード・ソフトの両面から実現していくのは、とても難しく、時間のかかる作業である。

## 1.2 準備期間を通して感じたこと

2016年春からスタッフ同士の顔合わせがはじまり、夏からは気仙沼市教育委員会および気仙沼市図書館の職員の方々と打ち合わせや下見を行った。そしてまずは秋の終わりに第1回のプログラムが行われることになった。

下見や打ち合わせの段階から、「多世代の人々が集い、学ぶ場としての図書館づくり」「ただ虫や植物を観察するのではなく、どのような自然環境のもとに地域が成り立っているのかを知る、広い意味での環境教育」「哲学対話というのは、子どもから大人まで同等な立場で話をしてお互いの考えを深めていくこと」…等々、時間と言葉をつくしてプロジェクトの目的が語られた。どんなにすばらしい構想でも、実際にそれに気仙沼の子どもたちが参加してみようと思ってくれなくては始まらないのであり、よくもわるくもその成果が残っていくのは気仙沼の地域である。東京から来るスタッフは、アカデミックな理想を地域自治の現場に押し付けてはならないし、そうしたところで後にはいいものは残らない。そんな気持ちがひしひしと伝わってくる話し合いであった。

子どもたちへの募集をどうするかというのが大きな課題であったが、気仙沼市教育委員会の職員の方から、ジュニアリーダーという制度に参加している子どもたちへ応募を呼びかけることを提案していただき、第一回への道筋がついた。ジュニアリーダーや（より上の年齢を対象にした）シニアリーダーとは、日本各地の地域自治体でつくられている制度のようで、子どもやユースを対象にした一種のリーダー育成事業である。とはいえ参加者の姿勢としては、リーダー育成事業へ志願してくるというより、学校をこえた友人づくり、学校外での多様な経験づくりという意味合いも強いようで、様々なタイプの子が各学校から数名ずつ参加しているとのことであった。

学校での学び（フォーマル教育）と学校外での学び（ノンフォーマル・インフォーマル学習）がゆるやかに結びつくという図書館構想を実現させる意味でも、今回のプログラムの参加者が色々な学校から参加してくれるのはいいスタートであった。また、新しくできる図書館複合施設は、小学校と中学校の敷地のちょうど間にあり、近くには市民会館や公民館もあるため、子どもから大人まで幅広い来館者とその多世代交流を見込んでいる。異年齢のスタッフと参加者が互いに影響を受けながら場をつくり、学び合っていく、そんなプログラム運営を目指して第1回は行われた。

## 2. 活動報告

今回、スタッフは土日の2日間、気仙沼に滞在し、現地の担当者4名（気仙沼市教育委員会生涯学習課および気仙沼市図書館職員の方々）とともに、1日目に最終的な下見と関係者の顔合わせ、2日目に現地の子どもたち向けのプログラムを実施した。

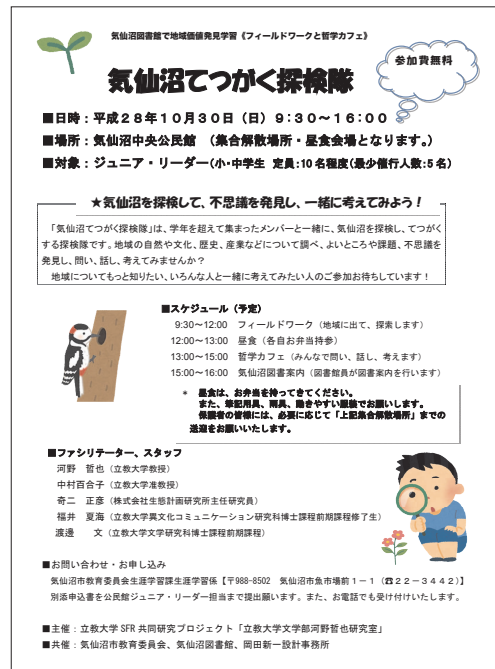
スタッフとして立教大学からは文学部の河野哲也教授、中村百合子准教授、司書課程非常勤講師の柳瀬寛夫氏、そして院生・修了生の2名が参加した。折しも来日していた香港聖公会明華神学院院長 Gareth Jones 氏、カタルーニャ（スペイン）の児童文学者 Joan Portel Rifà 夫妻が、日本の被災地域を知るとともに日本の多様な文化を経験する一環として一緒に現地を訪ね、下見とプログラムにも一部参加した。筆者はスタッフとしてプログラム運営を手伝うとともに、外国からのゲスト3名をアテンドした立場として、今回の報告を行いたい。

参加者募集のチラシにあるように、午前中に地域に出てフィールドワークを行い、午後は午前中の経験について哲学対話という形で振り返りながら深め合う作業、そして最後に図書館に行って興味のある資料を探したり選んだりするという流れで行われた。

参加者は、ジュニアリーダーの中から応募してきた小学生2名、中学生5名の合計7名である。

午前のフィールドワークの案内人はネイチャーガイドの奇二正彦氏、午後の哲学対話のファシリテーターは河野教授が行った。

（プログラムの詳細については、後日、柳瀬氏が別途、より詳細な報告を行うことになっている。）



気仙沼図書館で地域調査発見学習（フィールドワークと哲学カフェ）

### 気仙沼てつがく探検隊

参加費無料

■日時：平成28年10月30日（日）9:30~16:00  
■場所：気仙沼中央公民館（集合解散場所・昼食会場となります。）  
■対象：ジュニア・リーダー（小・中学生 定員：10名程度（最少催行人数：5名）

★気仙沼を探検して、不思議を発見し、一緒に考えてみよう！

「気仙沼てつがく探検隊」は、学年を超えて集まったメンバーと一緒に、気仙沼を探検し、てつがくする探検隊です。地域の自然や文化、歴史、産業などについて調べ、よいところや課題、不思議を発見し、問い、話し、考えてみませんか？  
地域についてもっと知りたい、いろんな人と一緒に考えてみたい人のご参加お待ちしております！

■スケジュール（予定）

- 9:30~12:00 フィールドワーク（地域に出て、探検します）
- 12:00~13:00 昼食（各自お弁当持参）
- 13:00~15:00 哲学カフェ（みんなで問い、話し、考えます）
- 15:00~16:00 気仙沼図書館内（図書館員が図書案内を行います）

● 昼食は、お弁当を持参してください。  
また、筆記用具、雨具、動きやすい服装をお願いします。  
保護者の皆様には、必要に応じて「上記集合解散場所」までの送迎をお願いします。

■ファシリテーター、スタッフ

- 河野 哲也（立教大学教授）
- 中村百合子（立教大学准教授）
- 奇二 正彦（株式会社生感計画研究所主任研究員）
- 福井 夏海（立教大学真文化コミュニケーション研究科博士課程前期課程修了生）
- 渡邊 文（立教大学文学研究科博士課程前期課程）

■お問い合わせ・お申し込み

気仙沼市教育委員会生涯学習課生涯学習係【〒988-8502 気仙沼市魚市場前1-1（☎22-3442）】  
別途申込書を公民館ジュニア・リーダー担当まで提出願います。また、お電話でも受け付けいたします。

■主催：立教大学 SFR 共同研究プロジェクト「立教大学文学部河野哲也研究室」  
■共催：気仙沼市教育委員会、気仙沼図書館、岡田新一設計事務所

気仙沼てつがく探検隊第1回チラシ

## 3. 考察

トラブルもなく、ゼロから構想したプログラムの最初としては成功だと思える満足感がスタッフみなにあったと思われる。下見とプログラム当日を含めた丸2日間で、次回につながる人とのつながりや発見もあり、後日には資金面での目途もついたため、今後は四季を通じての継続的な開催が予定されることになった。繰り返し実施していくことで構想を実現していくプロジェクトとしては、まだまだかなり磨きをかけていく必要がある。よって以下にいくつかの点から反省を述べたい。

### 3.1 スタッフ・参加者・ゲストの立ち位置について

今回は子どもの参加者が7名だったのに対して、スタッフが11名、ゲストが4名と大人がずいぶん多くなってしまった。そこで、子どもたちに対して「大人に見られている」というプレッシャーがかからないよう配慮が必要だった。カメラやレコーダーを向けられている時点で、人は敏感に自分の行動や言動を調整するものであり、子どもの場合はなおさら大人の目を意識しがちである。そこで、なるべく大人も「参加者」として行動すること、プログラムには子どもと対等な立場で参加すること、子どもたちが心を許せる大人のスタッフに加わってもらい、場をフォローしてもらうことが重要だと感じた。参加者が心を開いて参加できるプログラムデザインの必要性を、スタッフは再認識する必要があると思う。

子どもの集団に様々な年齢のスタッフが加わることは、結果としては全体が多世代の集まりになり、さらに今回は海外からのゲストもいたため、多様性という意味ではよりおもしろい集団になった。異文化コミュニケーションの機会として意識していたわけではなかったが、昼食の時間に英語でちょっとした会話をしたことは、子どもたちには印象的だったようである。このように、ゲストの存在が参加者のプログラムへの印象を左右することもある。プログラムの内容を充実させることはもちろんだが、参加者によってプログラムが変化していくことを考えれば、まずは参加者、そしてスタッフやゲストを含めた集団がどのようなものになっているか、そこに多様性は確保されているかといった確認をしていくことは大切な作業だと考える。

### 3.2 プログラムについて

最初のフィールドワークは、仮設図書館の近くの小学校からスタートした。学校の敷地内にある植物やそこにいる虫に足を止め、じっくり観察をするということは、一見何気ない行為のように思える。しかしそれは日常のモードから脱する大きな一歩である。普段生活している場所を普段生活している時の視点から外れて、見て、考えることで、自分たちのいる文脈は、やっとならば相対化される。そこではじめて日常の価値や課題は浮かびあってくる。

子どもたちは最初、講師が示したのや指を差したものに目を向けることから始めるが、だんだんと自分たちで気になるものを発見したり、観察したりするようになってきた。その様子が見られた時点で、プロジェクトが目指す一つのラインは越えられたように思う。このように自ら動き出し考える姿勢がフィールドワークでみられない場合は、おそらく午後の哲学対話でもおもしろいやりとりはうまくいかなかったからである。フィールドワークで体と心を動かし、その後の対話につなげるという流れができて、関係者一同ほっとしたのではないかと思う。

いわゆる自然観察だけではない、文化や歴史を含んだフィールドワークというのは、実はそんなに多くはない。私自身、一日のプログラムとして経験できたのはほぼ初めてであった。この形が可能であることがわかり、参加者からの反応もおおむね前向きだったため、今後も気仙沼の各地にヒントをもとめてユニークなフィールドワークを開発していけたらと思う。

哲学対話に関しては、進行役の何気ない一言、全体を把握したうえで刺激を与えられるような一言が効果をもつことがわかった。また、進行役だけでなく、記録も重要な役割を果たしている。スピード感をもってすべての発言を拾っていくこと、重要な発言を聞き逃さないことが必要なのだと思う。個人的にはもっと別の哲学カフェにも参加して場を経験したいと感じた。ただしゃべりさえすれば哲学対話になると思っていただけではないが、私がこれまで経験してきたディスカッションのような対話ともまたずいぶん違うと感じたからである。

一番課題が見えたのは図書館での活動部分であった。プログラムの終わりに図書館に行くということの意味がスタッフのなかでも共有しきれていなかったように思う。フィールドワークと哲学対話でいい経験ができたからといって、最後に図書館に放たれて自由に資料探しを楽しめるという人はそんなに多くない。事前にプログラムについて図書館側にくわしく伝えておいて、関連資料を用意してもらったり、司書が前半のプログラムにも関わったり、といったような形を模索していくことが必要だろう。新しい図書館を会場として哲学対話のようなイベントを行うという可能性以外に、図書館がハード面・ソフト面で積極的にこのような学びを支えられるようになることを理想として掲げておきたい。

全体として、参加者が満足感をもって経験を受け止めたかどうかは、慎重な検討が必要である。アンケートにはたいていの人はあまりネガティブなことは書かないので、参加者の表

情や発言、終わった後の様子などを総合的にみるようにしなければならない。今回の参加者はおおむね参加には前向きで、発言の頻度にも大幅な偏りはみられず、一回目としてはまずまずの満足度だったのではないかというのが個人的な印象である。しかし次回はより、参加者が思い切って発言できるような場づくりをしていくべきであるとも感じた。

### 3.3 今後に向けて

このプロジェクトが目指す構想は学際的であり、かなり広い分野を含んでいる。それぞれの専門家は自らの専門性を越えてある程度学ぶ必要があり、またお互いの分野や役割分担についても共通認識をしっかりとっていなければ、軸がぶれて長期的にはプロジェクトが続けられないだろうと思う。そのため、一回一回のプログラムの後で関係者は丁寧に反省をして認識を共有し、それをもとに次回のプログラムを行っていくべきだろう。スタッフとして情報を幅広く集めるとともに、関係者同士のつながりを深めながら、今後もこのプロジェクトの構想に関わっていければと思う。そして気仙沼という地で新しい図書館、新しい学びの場がうまれるのに少しでも力になればと願っている。

※このプログラムは、立教大学 SFR 共同研究プロジェクト「死生観と道徳性の生涯発達における対話の効果についての研究」（研究代表者・河野哲也）の支援のもと行われた。